慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一音節語の名詞の運命
Sub Title	On the history of monosyllables in the Japanese language
Author	池田, 利夫(Ikeda, Toshio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.13, (1961. 12) ,p.20- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00130001-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一音節語の名詞の運命

池田利夫

序

一音節語の名詞とは、例を以て先ず示すならば、木(キ)とか手(テ)とかいう類の、一音節からなる名詞である。又、拗音が果して日本語にあった音韻であるかどうかは問題であるが、蛇(ジャ)とか茶(チャ)も一音節であってみれば、それは、仮名の一つの文字で表示しうる名詞とも限らない。そう考えてみると、私どもの日常茶飯の会話にも、「夜(ヨ)ガアケタ」「血(チ)ガ出タ」「手(テ)ヲ洗エ」「居(キョ)ヲ構エル」などゝ、この名詞が頻りに出てくるようであるが、その数は、無制限という訳にはいかないのである。一体、日本語に音韻上区別しうる音節がどれ程存在するかは、正確には、現代と上代というように、時代によっても異るし、地域的にみても、各地方によって変化があろうから、それぞれに若干の異同はあるけれども、拗音を含めても、その数は知れている。又、同音異義の語も、それが特に一音節であってみれば、そう多く生じては他と区別出来ないであろうし、自然、この面での制限を受けるのも止むをえないが、それらは、必ずしも、すべての点について、多音節語と本質的な相異を示すものではない。確かに、一音節語は組み合せがない点で他と異るが、組み合せによって、超加速度的に増大する多音節語の可能的語彙量というものも、単に数量だけならば、やはり相対的な問題に過ぎない。更に、両者の間には、

出入りというか、密接な関係もあって、一音節語という特殊な面を追求する事が、同時に日本語一般の問題にもからんでくるので、この一群の名詞における言語現象の諸相を検討する事によって、普遍的な問題を抽き出すのも可能であろう。結論として至る至らぬは別として、考えを進める事にしよう。

一

我が国最古の分類体漢和辞書である倭名類聚鈔の和訓から、単独[註1]に表示された一音節語の名詞を抽出してみると、（狩谷棭斉の箋注倭名抄をも含めて、箋注本のみにある語には＊印を付した。）

畔*ア 膽イ 鵜鶘ウ 江エ 柄エ 荏エ 榎*エ 鹿カ 蚊カ 綺キ 葱キ 笥ケ 籠コ 粉コ 海鼠コ 囲ゴ 碁 羊蹄シ 菜 紗射 洲ス 酢ス 巣ス 瀬セ 湍セ 尨蹄セ 子 酥ソ 田タ

乳チ 血チ 茅チ 津ツ 戸ト 斗ト 菜ナ 丹砂ニ 沼ヌ 根ネ 野ノ 幅ノ 篾ノ 歯ヘ 翳ヘ 羽ヘ 葉ヘ 氷ヒ 目翳ヒ 杼ヒ 槭庶ヒ 氷漿ヒ 檜ヒ 戸邑之処*ヘ 舳ヘ 綜ヘ 帆ホ

穂ホ 魔鬼マ 軀ミ 箕ミ 猯ミ 鯈ミ 妻メ 裳モ 藻モ 屋舎ヤ 幅ヤ 箭ヤ 温泉ユ 柚ユ 羅ラ 瘻瘻ロ 艫ロ 輪ワ 井ヰ 蝙蝠ヰ 藺ヰ 猪ヰ 餌エ 麻ヲ 紘ヲ 尾ヲ 両節間ヨ

（両節間は箋注本になし）

の以上八十語[註2]にのぼる。そしてこの半数近くは、柄エ 蚊カ 田タ 血チのように、現代にも全くそのままの形で残っているか、又、粉コ↔粉コナのように、変化された表現と並行[註3]して使用しうる状態になっているし、他方、残りの過半も、元来が稀用の語であったり、現代の日常生活から遠い理由で用語から隔っている数種の語を除けば、殆んどが、その固有の音節を留めた形で変化し、残存している。

問題を展開していく上の障害にならない範囲で、想像が許されるならば、この変化というものは、一音節語の名詞が辿ってきた道について、ほゞ二つの示唆を与えてくれる。即ち、音価の上での変化を別にすれば、千年後の今日に至るまで、全く形を変えないで残っているというような、強靱な語彙の生命力を示している反面、とかく変化しようとする、それも、固有の音節を残したまゝで多音節化しようとする傾向が認められるというように、この一音節語の名詞には、矛盾した両面の性格があるのではなかろうか。

一例をとれば「葱キ」がある。倭名抄では、

葱 唐韻云葱 音聰 葷菜也 本草云葱茎 冷葉熱 和名紀

とあり、明らかに今日の〈ネギ〉[註4]であるが、元来の〈キ〉に、根を意味する〈ネ〉が添加されて、多音節化したのであろう。これは単なる想像ではない。「葱」には、古くから〈ヒトモジ〉という女房詞があり、それが一つの文字で表示されるもの、つまり一音節語である事を自ら[註5]語っているが、他方、〈シロネ〉なる女房詞も有力であって、現在、大分県などの方言で〈ネジロ〉と呼ばれているのも、共にその白い根を食[註6]するのに由来している。無論、直接に、〈シロネ〉の〈キ〉と言うことから〈ネギ〉になったとは直ちに断じえないが、〈ネ〉が根であるのを証するには十分であろう。〈ヒトモジ〉と言い〈シロネ〉と呼ぶのも、所詮はその一音節語の〈キ〉を避けたからにほかならぬので、これらが女房詞、いわば婦人語に属するのは、一音節語の持つ音感が、優美さに欠けるとか、発音しにくいとかの点があるのであろう。そして、発音がしにくいという事から、婦人語にやや共通した点のある小児語において、これがどのように受け取られたかなども、後節の問題として、考えておかねばなるまい。

多音節化の傾向は、既に倭名抄内部に於ても見られる。「畔」は箋注倭名抄では和名が

久路、一云阿

であるが、古典全集本では

畔　陸詞曰畔音半田界也（和名久呂一云阿世）

と、今日の〈アゼ〉になっている。又

羽（蓊字附）　唐韻云羽（音禹和名波）

とある同じ丁に

翮　爾雅集注云羽本曰翮（下革反字亦作朝和名八禰）

一云羽根也

とあり、〈ハ〉と〈ハネ〉を一応区別しているが、今日「羽根」と言えば、「羽」と全く異る所がない。

ところで、言語の変遷には、もとよりそれ自身の特質、傾向とか、音韻上の問題による所も多いが、大きな広がりを持つ文化史の面からも左右され、その様相は複雑を極めるので、以上の如く、倭名抄掲載の言語と、現代の日常語とを、ポツリと点線的に比較してみ

る事が、たとえ同じ操作を何度も繰り返したとしても、どれ程の結果が得られるか疑問であろう。その上、辞書には、生きた言語と死んだ言語とを同一平面上で取り扱う本来的な保守性を持つので、この観察と同時に、実際の時代時代の言語現象を反映した、他の文献をも徴する必要があると思われる。

註1　例えば「兄国　和名江久爾」の兄の如きはとらない意である。
註2　この他、地名として　勢　多　津　比　穂　乎　がある。
註3　例えば「粉」は〈コナ〉とも言うが〈コ〉としても使用されている。
註4　〈ナガネギ〉という言い方は、近代になって〈タマネギ〉が舶来してから生じた呼び名に過ぎない。
註5　同じ女房詞の〈フタモジ〉というのは〈ニラ〉を意味し、それが二音節語である事を表示している。
註6　現在、関東人はネギの白い部分を好んで食べ、関西人は青い部分を賞用するようであるが、古来、そのいずれにしろ、感覚的にその白い根に衆目が集ったであろう事は、想像にかたくない。なお、白い部分は、植物学的には当然根でなくて茎であろうが、土の中にある点で、根としてとらえられたのである。

二

語彙の研究において、その使用頻度と変化との関係の研究は興味がある。一般に、使用頻度の高い語彙程その生命は長いと解されているが、一音節語の名詞に関しても同様であるかどうか、所謂文学作品の時代系列の中から、近年、特に多く出版された用語総索引の類を利用して、その現象を観察してみよう。次に、少し煩わしいが、各作品別の用例[註1]と使用数を五十音順に配列してあげるが、ただ、遺憾な事には、公刊されている索引のみを利用するので、各時代の作品を自ら選ぶ訳にいかず、特に鎌倉時代以降が全くの手薄で、擬古文である徒然草一つではどうにもならぬが、今は致し方ない。作品は

上代＝古事記（訓点語を含む）日本書紀（字音仮名表記分のみ）万葉集
中古＝竹取物語、古今集、源氏物語、紫式部日記　更級日記
中世＝徒然草

の以上九作品である。

○古事記

あ	(畔)	3
う	(鵜)	3
え乙	(好)	1
か	(鹿)	1
き乙	(木)	11
き乙	(城)	1
こ甲	(子)	39
こ乙	(木)	1
こ	(海鼠)	3
こ	(卵)	2
せ	(瀬)	3
せ	(兄・夫)	4
せ	(背)	1
た	(田)	3
ち	(血)	7
て	(手)	8
と甲	(戸)	8
と甲	(外)	5
な	(名)	95
な	(魚)	6
な	(菘)	1
に	(土)	1
に	(丹)	1
ぬ甲	(野)	9
ね	(根)	5
ね	(音)	3
は	(刃)	1
は	(羽)	3
は	(葉)	6
ひ	(梭)	1
ひ乙	(地名 肥)	1
ひ甲	(桧)	1
ひ乙	(火)	16
ひ甲	(日)	15
ひ	(樋)	1
へ	(上)	18
へ甲	(辺)	6
ほ	(地名 穂)	1
み乙	(身)	21
み乙	(実)	3
め乙	(目)	4
め甲	(女・妻)	12
め	(海布)	1
め	(芽)	1
も	(裳)	2
も	(喪)	1
や	(矢)	23
や	(屋)	4
や	(箭)	1
ゆ	(湯)	1
よ甲	(夜)	9
よ乙	(世)	1
ゐ	(猪)	5
ゐ	(井)	3
ゑ	(餌)	2
を	(緒)	8
を	(峡)	1
を	(男・夫)	7
を	(尾)	4
を	(麻)	2

○日本書紀

き乙	(城)	2
き乙	(木)	4
け乙	(木)	1
こ甲	(子)	19
し	(磯)	1
し	(羊蹄)	1
せ	(夫)	1
せ	(兄)	3
ち	(父)	1
て	(手)	6
と	(間)	1
な	(菜)	1
な	(魚)	1
な	(名)	1
な	(中)	1
ぬ	(瓊玉)	1
ね	(根)	1
の甲	(野)	2
ひ甲	(日)	1
ひ甲	(桧)	1
ふ	(乾)	1
へ甲	(辺)	2
へ甲	(家)	1
へ乙	(瓮)	1
へ乙	(上)	2
ほ	(秀)	1
み甲	(海)	2
み	(実)	2
め甲	(女)	1
め乙	(目 綱目)	2
も	(藻)	1
も	(姜)	1
え	(枝)	2
よ	(夜)	1
よ	(世)	2
ゐ	(猪)	1
を	(命)	1
を	(緒)	1

○万葉集

あ	(足)	2
い	(寝)	10
う	(鵜)	5
え	(枝)	3
か	(香)	3
か	(鹿)	4
き	(地名)(紀)	3
き	(木)	14
き	(城)	1
き	(酒)	2
け	(笥)	2
け	(気)	1
け	(経)	9
け	(来・東歌)	1
こ	(児)	89
こ	(蚕)	3
こ	(籠)	2
す	(酢)	1
す	(渚)	3
す	(巣)	2
せ	(地名)	2
せ	(瀬)	63
せ	(夫・兄・弟)	33
た	(田)	21
ち	(乳)	2
つ	(津)	4
づ	(頭)	4
て	(手)	77
と	(戸)	6
と	(門)	4
と	(外)	4
と	(音)	1
と	(時)	5
と	(利)	10
な	(名)	96
な	(魚)	1
な	(菜)	1
に	(荷)	1
ぬ	(野)	60
ね	(嶺)	3
ね	(根)	5
ね	(音)	28
ね	(哭)	26
の	(野)	2
は	(羽)	2
は	(葉)	9
ひ	(日)	161
ひ	(火)	13
ひ	(氷)	2
ひ	(桧)	1
ふ	(節)	1
へ	(家)	6
へ	(舳)	8
へ	(辺)	88
ほ	(穂)	17
ほ	(帆)	1
ま	(馬)	1
ま	(間)	76
み	(実)	21
み	(身)	53
み	(見)	11
め	(女)	3
め	(目)	50
め	(藻)	1
も	(裳)	15
も	(藻)	1
も	(喪)	3
も	(妹)	1
や	(矢)	3
や	(屋・家)	3
ゆ	(湯)	3
よ	(夜)	144
よ	(世・代)	31
ゐ	(井)	2
ゑ	(絵)	1
を	(峯)	8
を	(弦)	1
を	(尾)	6

○竹取物語

い	(寝)	1
き	(木)	6
け	(毛)	3
こ	(子)	17
こ	(籠)	2
す	(巣)	6
ち	(血)	2
て	(手)	9
と	(外)	3
と	(戸)	1
な	(名)	6
ね	(根)	2
ね	(子)	1
は	(葉)	1
ひ	(火)	5
ひ	(日)	6
め	(妻)	2
め	(目)	4
も	(裳)	1
や	(屋)	9
よ	(節)	1
よ	(夜)	4
よ	(世)	15
ゑ	(絵)	1
を	(尾)	3

○古今集 (〔〕内ハ、仮名序・左注・詞書ノモノ)

○源氏物語

な	(雛)	2
に	(二)	34
ね	(根)	11
ね	(音)	153
ね	(哭)	18
ね	(子)	1
ね	(寝)	3
の	(野)	19
は	(葉)	10
は	(歯)	1
は	(羽)	2
は	(端)	1
ひ	(日輪)	32
ひ	(日暦)	82
ひ	(火・燈)	42
ひ	(氷)	4
ふ	(譜)	2
ほ	(穂)	2
ま	(間)	63
み	(身)	611
み	(実)	3
み	(己)	3
み	(見)	21
め	(目)	215
め	(女・妻)	8
め	(芽)	3
も	(裳)	10
も	(藻)	1
や	(屋)	6
ゆ	(湯)	5
ゆ	(由)	2
よ	(世・代)	1326
よ	(夜)	242
ら	(羅)	1
わ	(輪)	1
ゐ	(井)	3
ゐ	(亥)	1
ゑ	(絵)	51
ゑ	(会)	1
を	(緒)	5

い	(寝)	3
う	(卯)	1
う	(鵜)	1
え	(縁)	1
え	(枝)	4
え	(柄)	3
か	(香)	58
が	(賀)	2
き	(木)	19
き	(綺)	7
き	(黄)	4
き	(季)	1
ぎ	(義)	1
く	(句)	2
ぐ	(具)	11
け	(気・病・趣)	25
け	(故)	28
け	(野)	1
げ	(偈)	1
こ	(子)	81
こ	(籠)	6
こ	(胡)	2
ご	(碁)	15
さ	(然)	2
ざ	(座)	10
し	(師)	23
し	(詩)	1
し	(為)	6
じ	(時)	2
す	(簾)	9
す	(巣)	1
せ	(瀬)	17
た	(田)	5
ち	(乳)	2
ち	(地)	2
ぢ	(地)	2
ぢ	(持)	1
て	(手)	135
と	(戸)	27
と	(外)	25
な	(名)	102

ひ	(火)	8
ほ	(穂)	(1) 10
ほ	(帆)	1
ま	(間)	(2) 27
み	(身)	(10) 84
み	(実)	3
め	(目)	(1) 21
め	(女)	(2)
め	(芽)	2
も	(面)	3
も	(裳)	(2)
も	(藻)	2
ゆ	(湯)	(1)
よ	(世)	(12) 45
よ	(夜)	(3) 44
よ	(節)	3
ゑ	(絵)	(2)
を	(緒)	2
を	(尾)	1

い	(寝)	3
え	(枝)	1
え	(柄)	1
か	(香)	23
き	(木)	(10) 15
き	(棺)	1
く	(句)	(2)
げ	(下)	(3)
こ	(子)	(1) 1
こ	(木)	(5) 18
こ	(蚕)	(1)
ご	(期)	1
し	(四)	(1)
す	(洲)	(1)
せ	(瀬)	(1) 13
た	(田)	5
ち	(茅)	(1)
て	(手)	(1) 5
と	(門)	1
な	(名)	(4) 40
に	(二)	(1)
ね	(音)	(1) 21
ね	(根)	(1) 5
ね	(嶺)	1
の	(野)	(4) 24
は	(葉)	(4) 22
は	(羽)	2
ひ	(日輪)	(1) 6
ひ	(日暦)	(25) 21
ひ	(緋)	1

○紫式部日記

ぐ	(具)	1
けこ	(気)	1
こ	(子)	1
ざ	(座)	6
す	(巣)	1
て	(手)	4
と	(戸)	3
とな	(外)	5
な	(名)	4
なね	(難)	1
ね	(根)	4
ね	(音)	1
ひ	(日輪)	2
ひ	(日暦)	12
ひ	(火)	4
ま	(間)	8
み	(身)	18
み	(実)	1
め	(目)	13
も	(裳)	19
よ	(世)	26
よ	(夜)	23
ら	(羅)	1
ゑ	(絵)	3

○更級日記

いき	(寝)	2
きき	(木)	8
きこ	(黄)	3
こざ	(子)	3
す	(座)	1
たち	(洲)	1
つて	(田)	4
とと	(地)	1
なに	(津)	1
ねね	(手)	3
のは	(野)	4
ひ	(戸)	5
ひみ	(外)	13
めや	(名)	7
よよ	(丹)	1
ゐ	(音)	7
ゑ	(根)	1
	(野)	6
	(葉)	5
	(日)	13
	(火)	7
	(身)	12
	(目)	10
	(屋)	1
	(世)	29
	(夜)	51
	(井)	1
	(絵)	2

○徒然草

い	(寝)	2
いい	(医)	2
う	(禹)	1
え	(柄)	2
か	(可)	1
きき	(驥)	2
きぎ	(木)	16
ぎぎ	(義)	1
く	(儀)	1
くぐ	(九)	1
ぐけ	(句)	1
けこ	(具)	1
こご	(愚)	1
ござ	(毛)	4
ざし	(気)	3
ししし	(子)	15
ししじ	(籠)	1
じす	(菓)	3
ぜた	(期)	2
ただ	(五)	5
ちち	(座)	6
ちづ	(詩)	1
て	(師)	7
と	(死)	16
	(士)	1
	(四)	1
	(字)	2
	(璽)	1
	(巣)	1
	(是)	1
	(田)	6
	(他)	7
	(瓣)	1
	(血)	2
	(地)	3
	(智)	12
	(図)	2
	(手)	19
	(戸)	1

と	（外）	1
な	（名）	23
な	（号）	2
ね	（根）	3
ね	（音）	2
の	（野）	1
は	（葉）	3
は	（刃）	1
ひ	（陽）	1
ひ	（日）	26
ひ	（火）	8
ひ	（非）	5
ふ	（武）	3
ほ	（穂）	1
ま	（間）	8
み	（身）	58
め	（目）	25
め	（妻）	1
め	（矢）	7
や	（屋）	2
や	（世）	66
よ	（夜）	18
よ	（利）	9
り	（盧）	1
ろ	（輪）	1
わ	（絵）	3
ゐ	（餌）	1
ゐ	（緒）	1
を		

以上の表によってわかるように

	（異り語彙数）	（総用例数）
古事記	六〇語	四一一例
日本書紀	三八語	七五例
萬葉集	七八語	一三六六例
竹取物語	二五語	一一一例
古今集	四九語	五九一例
源氏物語	八一語	三六五〇例
紫式部日記	二四語	一六二例
更級日記	二七語	一八一例
徒然草	六七語	四三六例

と作品の長短により語数、総例数とも変化しているが、その割合は算術平均とはならず、総例数の比ではより大きな振幅を、そして語数では余りに小さい振幅を示している。前者の事実を如何に説明するかは姑く措くとして、後者の場合、一音節語が、同音異語を無制限に発生せしめ得ぬ限り、音韻上のきつい制約を必然的に受けるという、始めに考えた条件の現われであろう。それでも九作品を通じて重複した語彙を整理してみると、総異り語彙数は一八四語にのぼる。今、各作品における個々の語のそれぞれの使用頻度は考えずに、如何なる語彙が如何に多くの作品にわたって使用されているかを考察してみよう。これは、同時に各語彙の時代時代の生命をも見

ることになるが、こゝでは、たゞ三作品以上にわたっている一音節語名詞を、順次多いものから示すことにする。（但し、各作品数範囲についてで、各〻の中では五十音順による。）

○九作品全部にわたるもの—八語

子(コ)　手(テ)　名(ナ)　根(ネ)　日(ヒ)　目(メ)　世(ヨ)　夜(ヨ)

○八作品にわたるもの—三語

木(キ)　戸(ト)　火(ヒ)

○七作品にわたるもの—七語

外(ト)　音(ネ)　葉(ヘ)　日輪(ヒ)　身(ミ)　女(メ)・妻(メ)　絵(エ)

○六作品にわたるもの—六語

寝(イ)　田(タ)　野(ノ)　実(ミ)　裳(モ)　屋(ヤ)

○五作品にわたるもの—三語

巣(ス)　間(マ)　緒(ヲ)

○四作品にわたるもの—一一語

枝(エ)　気(ケ)　籠(コ)　座(ザ)　瀬(セ)　羽(ハ)　穂(ホ)　藻(モ)　湯(ユ)　井(キ)　尾(ヲ)

○三作品にわたるもの—十五語

鵜(ウ)　柄(ヘ)　香(カ)　城(キ)　句(ク)　具(グ)　兄(セ)・夫(セ)　地(チ)　血(チ)　菜(ナ)　魚(ナ)　檜(ヒ)　辺(ヘ)　芽(メ)　矢(ヤ)

○二作品にわたるもの—三二語

（用例略）

○一作品のみにみるもの—九九語

（用例略）

合計　一八四語

即ち、多作品にわたる語は限られていて、過半、五作品以上にわたる語彙は僅か二七語総語彙数の一割五分に満たない。これは、逆にいえば、広い範囲で使用される一音節語名詞は、使用頻度を別にしても、極く限られていることを示している。国語大辞典の一、大言海には、[註3]借用語を含めて五一九語の用例が解説されているが、普く使用される語がさ程多くないのを知らねばならない。そして更に気づく点は、範囲とする作品数が広くわたればわたる程、それらの語彙は、現代でもそのまま使用されているか、音韻の転移した同義語が別にあっても、それと並行して猶使用される語[註4]が多いことであろう。

三作品にわたる十五語の裡、注目すべき点は

城(キ)　夫(セ)・兄(ト)　魚(ヒ)　檜(ヘ)　辺

の五語が、古事記、日本書紀、万葉集の所謂奈良時代用語に限られている点である。これは二作品以下にのみ見られる語でも

足(ア)　畔(エ)　好(カ)　鹿(キ)　紀(地名)(キ)　酒(キ)　笥(ケ)　木(ケ)　経(ク)　来(コ)　海鼠(コ)　卵(コ)　磯(シ)　羊蹄(シ)……

と五一語にも及んでいる。この中には、平安以後の作品に、偶〻用例がなかった場合[註5]も若干あるが、それは極く僅かと思われ、大部分は奈良時代のみに行われ、語としての生命を早く失ったものと察せられる。そして、今奈良時代三作品のみに用例を持つ五六語を、総例語から除いてみると、それらの殆んど多く（70～80％）が現在そのまゝか、そのまゝでも使用しうる形で残っていることは、次の推論を与えるに充分であろう。即ち、奈良時代から平安時代へ入るまでに、一音節語の名詞の多くは転移、変化を受けてしまったが、その時そのまゝで残ったものは、平安時代以後には殆んど失われることなく、長い生命を保ち続けていることである。そして、奈良時代にみえなくて、平安時代に初見される語が多く借用語である点と思い合せると、和語[註6]の一音節語名詞は、奈良―平安の間にその受難[註7]時代を経て以来、強靱な生命力をもって、全語彙の一角に順調な運命を保ち続けてきたといえる。

次に、前にあげた各作品の各語頻度表[註8]を、見易いように、それぞれの作品内でどの様な順位を持っているか一覧してみよう。用紙の都合で二十六位迄にしたが、勿論便宜的なものに過ぎない。又、語彙数、用例数の少い作品では同一頻度の語、特に一例づつの語が多く、それは五十音順に配列したが、○×印の連統したものは上下がない順位であると見なくてはならない。用例数も、却って絶対数に

惑わされるのを恐れて付さなかった。

作品別一音節語名詞使用頻度順一覧

注　連続セル○印及×印は同数同順位ナルコトヲ示ス。

作品＼使用頻度順位	古事記	日本書紀	万葉集	竹取物語	古今集	源氏物語	紫式部日記	更級日記	徒然草
1	名ナ	子コ	日ヒ	子コ	身ミ	世ヨ	世ヨ	夜ヨ	世ヨ
2	子コ	手テ	夜ヨ	世ヨ	世ヨ	身ミ	夜ヨ	世ヨ	身ミ
3	矢ヤ	木キ	名ナ	°手テ	夜ヨ	夜ヨ	裳モ	日ヒ	日ヒ
4	身ミ	兄セ	児コ	°屋ヤ	日暦ヒ	目メ	身ミ	身ミ	目メ
5	上ヘ	°城キ	辺ヘ	×木キ	名ナ	音ネ	目メ	目メ	名ナ
6	火ヒ	°野ノ	手テ	×巣ス	間マ	手テ	日暦ヒ	木キ	手テ
7	日ヒ	°辺ヘ	間マ	×名ナ	野ノ	名ナ	間マ	°音ネ	夜ヨ
8	女・妻メ	°上ヘ	瀬セ	×日ヒ	葉ハ	日暦ヒ	座ザ	°火ヒ	°木キ
9	木キ	°海ミ	野ヌ	火ヒ	木キ	子コ	外ト	野ノ	°死シ
10	°野ノ	°実ミ	身ミ	°目メ	°香カ	間マ	°手テ	葉ハ	子コ
11	°夜ヨ	°目メ	目メ	°夜ヨ	°木コ	香カ	°名ナ	×田タ	智チ
12	×手テ	°枝エ	夫・兄セ	°毛ケ	×音ネ	絵エ	°根ネ	×戸ト	利リ
13	×戸ト	°世ヨ	世ヨ	×外ト	×目メ	火ヒ	°火ヒ	°黄キ	×火ヒ
14	×緒ヲ	×木ケ	音ネ	×尾ヲ	瀬セ	二ニ	×戸ト	°子コ	×間マ
15	°血チ	×磯シ	哭ネ	°血チ	穂ホ	日輪ヒ	×絵エ	°手テ	°師シ
16	°男・夫ヲ	×羊蹄シ	°田タ	°根ネ	°根ネ	故ケ	日輪ヒ	°名ナ	°他タ
17	×魚ナ	×夫セ	°実ミ	°妻メ	日輪ヒ	戸ト	°具グ	×寝イ	°矢ヤ
18	×葉ハ	×父チ	穂ホ	°籠コ	手テ	気ケ	°気ケ	×絵エ	×座ザ
19	×辺ヘ	×間ト	裳モ	×寝イ	根ネ	師シ	°子コ	°座ザ	×田タ
20	°外ト	×菜ナ	木キ	×戸ト	田タ	見ミ	°巣ス	°洲ス	°五ゴ
21	°根ネ	×魚ナ	火ヒ	×子ネ	×寝イ	°木キ	°離ナ	°地チ	°非ヒ
22	°猪キ	×名ナ	見ミ	×葉ハ	×下ゲ	°野ノ	°音ネ	°津ツ	毛ケ
23	×兄・夫セ	×中ナ	×寝イ	×裳モ	×実ミ	哭ネ	°実ミ	°外ト	×気ケ
24	×目メ	×瓊玉ヌ	×利ト	×節ヨ	×面モ	瀬セ	°羅ラ	°丹ニ	×碁ゴ
25	×屋ヤ	×根ネ	°経ケ	×絵エ	×節ヨ	碁ゴ		°根ネ	×地チ
26	×尾ヲ	×日ヒ	°葉ハ		句ク	根ネ		°屋ヤ	×根ネ

表を一覧して先ず気づくのは、作品の時代、内容、形態が各々大きく異っているのに、この順位、とりわけ平安時代以降がお互変りばえがしない点であろう。ベスト10、ベスト20に横線をひき、[註9]ベスト10に入る語彙を指数2、ベスト20を指数1として整理すれば、各

語彙の頻度を、全体の作品を通じて比較することが出来る。

○指数17のもの―二語

日ヒ　夜ヨ

○指数15のもの―一語

世ヨ

○指数14のもの―五語

子コ　手テ　名ナ　身ミ　目メ

○指数11のもの―一語

木キ

○指数10のもの―二語

野ノ[註10]　火ヒ

○指数9のもの―一語

間マ

○指数7のもの―一語

音ネ

即ち、わかりやすく指数4以上の語を順位に従って配列すると（連統せる○×印は同順位である事を示す）

°日ヒ　°夜ヨ　世ヨ　×子コ　×手テ　×名ナ　×身ミ　×目メ　木キ　°野ノ　°火ヒ　間マ　音ネ　辺ヘ　×戸ト　×根ネ　°葉ヘ　°絵エ　……

となる。これはなんと、前の作品範囲順語彙に類似しているのであろうか。かの順は、

°子コ　°手テ　°名ナ　°根ネ　°日ヒ　°目メ　°世ヨ　°夜ヨ　°木キ　×戸ト　×火ヒ　外ト　音ネ　葉ヘ　日ヒ輪　身ミ　女メ・妻　絵エ　……（七作品以上にわたる語）

で、両者のベスト18[註11]の裡、実に15語の

木子手戸名根音葉日火身目夜世絵（五十音順）

が共通している。これは範囲に於ても、頻度に於ても広く高く使用される語で、これが例外なしに今日使用されることは、前にも述べた通り、一音節語名詞の生命が、全くその使用頻度と使用範囲によって決定され、且、頻度と範囲が全くスライドすることを証明している。

ところで、使用頻度と作品範囲の広さが一致するのは、何も手續を経て証明する迄もなく、始めから自明の事である。何故なら、頻度が高ければ、ある作品にその語が含まれる確率も又高いのが当然で、先に「頻度は別にしても」と述べたのは、「どちらか一方を見れば同じだから、今頻度を別にして」の意で、ただ予想される理論が事実により証明しえた点、無駄な操作ではなかった。頻度の最も高い語が、日と夜であるのも興味深い。

一音節語名詞が奈良時代から平安時代へ入る間に大分淘汰された事実のあるのは既に述べたが、頻度指数を、古事記、日本書紀、万葉集の奈良時代三作品のみによって整理すると、語彙の順位は全体のと若干変ったものとなる。指数順位のみを示すと、

子　野　木　日　辺　名　上　身　夜　夫・兄　手　実　目　世　瀬　火　間　海　女・妻　矢……

となるが、この裡奈良時代以後用例[註12]を見ないのは、

辺　上　夫・兄　海

の僅か四語で、残りの十六語中十語が先の全作品高頻度広範囲十五語に共通する点、やはり、奈良時代に使用頻度の高かった語彙は、その受難時代に於てもよく生命を保ち続けたことを証している。

ここで、実作品の用例と、前節の倭名類聚鈔のそれとの関係を一言したい。紙幅の都合などで、余り詳しくは考察しえないが、参考になる事実のみを述べておこう。

即ち、倭名抄所出分[註13]八六語、九作品綜合所出分一八四語中、共通してある語は五一語、倭名抄所出語の約六割に当る。そして、共通する語の[註14]多くが奈良時代のみの語か以来の語であるのも、倭名抄の成立、その目的、内容を考えれば当然であろう。又、先の高頻度広範囲十五語の倭名抄に見える語が、

戸根葉身

の僅か四語に過ぎぬのは、かの十五語に物質の名でない名詞が含まれているからではあっても、注目して良い。

註1　元来動詞の語幹であるが、その機能から、文法上屢々名詞に入れられる語、即ち、寝見の類をも含めた。

註2　$\frac{27}{184}\times100=14.6\%$

註3　勿論、中国からの借用語である。

註4　夜は〈ヨル〉とも〈ヨ〉とも使用されているし、世も、世の中、世間などの派生語にまじって、共にその生命を保っている。

註5　酢など、万葉集のみにしか用例を見ないが、平安以降使用されていなかった訳ではない。

註6　借用語であっても、日本の作品で使用されていれば日本語に違いはないが、この和語とは、便宜的に、借用語を除いた意に用いた。

註7　受難時代という言い方には色々問題があり、何故に大きな変化がここで起っているのか、資料自体の検討から始めて考える必要があるが、小稿の表題である「運命」という言葉に調子を合せて、今使ってみた。

註8　この場合、その作品内の用例数の順位を以て頻度と考える。そこで、数字は一作品内に於てのみ相対的意味を持ち、他作品とでは比較の対象にならない。

註9　表で10位以下に記されてあっても、10位以内と同順位符号、即ち○×印がつけてあれば、ベスト10に入る。ベスト20の場合も同様である。又表に記されてなくても、日本書紀の如く、一例がすべて14位に入るものは指数1となる訳である。なお、順位そのものを指数として計算せず、それを大きく群に分けて考えるのは、順位の数値自体が何等の意味を持たない上に、数値が不必要に多く且細かくなって、全体を見通せないからである。その他の理由もあるが、あとは省略に従いたい。九作品全部を通して十位以内に入る語があれば、それは指数18となる。

註10　野は、従来上代に限って〈ヌ〉と訓む場合が多かったが、最近の万葉集の研究などでは〈ノ〉と訓む説が有力なので、すべて〈ノ〉に統一した。

註11　両者の数をそろえる意図はあったが、かく一致したのは偶然である。

註12　勿論、調査した九作品の範囲での事で、厳密に以後の用例がないとは言えない。しかし、所見があったとしても、頻度が極めて小さい、とだけは言えよう。

註14　地名をも含めた。実作品の用例がそれを含んでいるからである。

註14　殆んどと言って良い、九作品用例中では、奈良三作品に見えぬ共通語は僅か七語で、それも、他の上代の文献に、所見が当然期待されそうな語ばかりである。参考にあげれば、柄、綺、碁、茅、齒、羅、輪、である。

三

前節では、一音節語の名詞のうち、どの語が最も大きな使用頻度を持つかを調査して、その生命力との関係をほぼ明らかにしたが、本節では、そのままの生命を保ちえないで、或は死語となり、或は音韻の転移、変化を受け、或は派生語に本家を奪われる運命を辿った語について考察を加えよう。それは多音節化の道であるが、第一節でも述べた「葱(キ)」→〈ネギ〉のように、それが行われた場合、添加した音節の意味、又事情がどうであるか、即ち、多音節化名詞の語源がすべて明らかになる訳ではない。それらには、明証を充分得るものもある反面、色々の可能性のみ考えられている語もある。又、多音節化が、各語に関していつの時代に行われたかは、それを文献で溯りうる限り辿ってみれば、ある程度はっきりするであろうが、俄に出来る操作ではない。そこで、本節では若干の時代的類推を試みるにとどまるが、同じ多音節化といっても、子細に検討すると、自らその中に様式が認められる。今、その個々の例をあげよう。

(1) 同じ音節を一つ添加し、繰り返すことによって二音節化する語

即ち、

父(チ)→父(チチ)

乳(チ)→乳(チチ)

がそれである。この変化には、小児語、婦人語の要素が入っているのではないかと考えているが、次節で検討するとして、父(チ)は早く奈良時代に消失転移したようで、乳(チ)は平安以後にもとどまった。

(2) 類の一を、その類の総称をも含めて固定された語

即ち、

猪(キ)のしし→猪(キノシシ)

檜(ヒ)の木→檜(ヒノキ)

榎(エ)の木→榎(エノキ)

などの類で、元来は、「桜の木」とか「梅の木」と現在いう様に類称の「木」や「しし」の意識が別にあったが、遂には一語として固定してしまった。

(3) 類の一を、他と区別する修飾語（主としてその属性）を含めて固定した語

即ち、

蚕（コ）→蚕（カヒコ）

海鼠（コ）→海鼠（ナマコ）

卵（コ）→卵（タマゴ）

の類で、元来は、[註1] 飼ふ所のコであり、なまのコであり、玉のコであったのが固定したと思われる。

(4) 名詞の表示する対象の一部分の名が、対象全部の意になった語

即ち、

羽（ハ）→羽根（ハネ）

畔（ア）→畔（アゼ）

の類で、両例とも既に初節で触れた通り、羽根は羽のつけ根、根本であったものが、畔は[註2] 畔（アゼ）の畝（セ）であったものが、それぞれ全体の意になったのであろう。そして後者が倭名抄に双方を異本によって見ることは、述べた。

(5) 名詞の表示する対象の一種類の名が、対象全部の意になった語

即ち、

鹿（カ）→牡鹿（セカ）→鹿（シカ）

棺（キ）→ひと棺（ヒトノギ）→棺（ヒツギ）

の類で、大言海の所説によると、牡鹿は牝鹿（メカ）に対するという。牝鹿の対ならば牡鹿であるべきようにも思うがどうであろうか。仁徳紀三十八年七月の条には「牡鹿」の例がある。猪（キ）→猪（キノシシ）の例同様鹿（カ）も「鹿（カ）のしし」の形の古語があって、〈シカ〉の〈シ〉は〈シシ〉

の〈シ〉かとも考えられるが、勿論何の根拠もない。〈ヒツギ〉には景行紀四十三年の条に「棺槻」とあり、ともかく両者とも早くから、〈シカ〉、〈ヒツギ〉の変化をしていたものと思われる。

(6) 全く別の源を持つ語に変化した語

即ち、

氷（ヒ）→氷（コホリ）

魚（ナ）→魚（サカナ）

の類で、氷は、倭名抄に

氷　水寒凍結也和名比文云古保利

とあって、両者併用が古くから行われていることを知るが、〈サカナ〉の〈ナ〉は〈魚（ナ）〉ではなく、〈酒菜（サカナ）〉であると思われる。魚、そのものの多音節化として、美称、「真魚（マナ）」があったが、今日、「まないた」として残っているに過ぎない。

大体、語源を明らかにしうる多音節化の様式は以上の如くであるが、この他にも延音となるもの、音韻転化したもの等考えられ、現代口語と関連せしめれば更に各様式が見られるが、それらは次節で述べよう。以下、参考までに多音節化の各例を列記するが、これらは以上の一様式に含まれるか、又は語源が明確を欠いて、わからぬものもある。語源は思いつきでなされてはならぬが、私が参照した大言海のそれも、どうかと考えられる解釈[註4]が屢々であった。[註3]

枝（エ）→枝（エダ）　籠（コ）→籠（カゴ）　外（ト）→外（ソト）　門（ト）→門（カド）　端（ヘ）→端（ハシ）　上（ヘ）→上（ウヘ）　海（ミ）→海（ウミ）

餌（エ）→餌（エサ）　沼（ヌ）→沼（ヌマ）　夜（ヨ）→夜（ヨル）　簾（ス）→簾垂（スダレ）　等々

一方、一音節語の名詞に於て、対象そのものが、その後の日常生活から隔たるか、対象自体の変化による別称の発生で、死語となる例も少なくない。羅の如き語も、倭名抄所見の動植物名の多くもそうであるが、これは一音節語に限った事ではなく、他の多音節語名詞一般に及ぶ問題であろうから、本論の目的からみて、省略に従って良いであろう。そして一音節語の名詞が、どの様式で多音節化したとしても、その原因となる所は、音韻の面での特殊性によるのであろう事は、容易に想像出来るが、逆にこうした多音節化の現象面

から、一音節語のやや不安定な音韻を説明する事も出来よう。

註1　カールグレンは、かひは蛺（カブ）→カヒだとしているが、とらない。

註2　これには「間塞（アヒセキ）ノ義ニヤ」という倭訓栞の説もあるが、信ずるに足りない。

註3　例えば、羊蹄（シ）→シイ　梭（ヒ）→ヒイ　などがある。

註4　例えば、粉（コナ）の語源は、熟（コナシ）の語幹によるように大言海は説明するが、さすれば〈コナ〉は当然〈コ〉より以前にその用例を見、〈コ〉は逆に一音節語の二音節化になる筈であるが、事実は反対である。

四

ここまで、私は一音節語の名詞を、時間というタテの関係を上下し、一方での生命力の強さと、一方での不安定な性格という矛盾した両面を考察してきた。そこで、今度は、現在の場に於て、彼等がどんな広がりを見せ、どのような位置を保っているのか、ヨコの関係を併せ考えて、解剖を加えてみよう。

現代用語、と一口に言っても、まだ文語と口語の区別のほか、標準語と方言の差異や、婦人語、小児語、職業語等、さまざまな分野がある。ここでは、特に口語の中で、所謂[註1]俗語、方言、婦人語、小児語について触れてみたい。

現在の婦人語で、名詞のみに関して言うならば、すべてに丁寧語の「お」を冠する主潮に圧倒されているが、こうした風潮が既に室町時代から現われている事は、例えば、[註2]日葡辞書の用例から「お」を冠した語を拾い出してみると、それらの殆んどに[註3]「婦人語」と断っているのでも明らかであろう。又、婦人語と小児語が極めて近接した関係にあるのは周知の事であり、それはいわば、カタコト化への傾向である。古い時代の婦人語、所謂女房詞の中に、「文字ことば」があり、これには第一節で例にあげた、「ひともじ」「ふたもじ」なども含まれるが、多くはある名詞のカシラ一字に「もじ」を付けて言うのである。現在でも僅かに残っている「かもじ」[註4]「ゆもじ」「しゃもじ」などの類がそれで、今迄考察してきた一音節語名詞の多音節化とは逆に、音節そのものは二以上であっても、対象を表示する語は却って一音節化されている、この事実は、以上の多音節化の傾向が、一音節では意味を把握しにくいと考えられる理由のほかに、何かあることを示しているようである。そして、婦人語が「もじことば」によらぬ場合、その頭文字を繰り返す言い方をする傾向

があるのは、又歴史的にも証明しうることで、これは、現在小児語にそのまま見られるのである。例をあげれば、

かか（母）　かか（鰹節）　ぞぞ（草履）　ぜぜ（銭）　とと（父）　とと（魚・鳥）

のの（神・月・仏）　ばば（汚物）　べべ（着物）

などそれであるが、[註5]これが元来の一音節語である場合も、同様の方式で二音節化している。そして、更に「お」を冠する事が多いのも、上記の例と同じである。即ち、

じじ（字）　てて（手）　なな（菜）　めめ（目）

などがそれで、これは第一音節を長母音化して、[註6]「キーキがわるい」というように発音する場合もある。私が第三節で、父（チ）→父（チチ）　乳（チ）→乳（チチ）の変化が、婦人語や小児語の面で行われたのではないか、と[註7]示唆したのは、これらの言葉が小児に直接した内容であるのと、以上の様式が、このように、ほかにもあるからである。

次に、所謂俗語の中で、一方で一音節語がそのままの生命を保ちながら、砕けた日常の会話では、愛称のように多音節化されている幾つかの群がある。

なっぱ（菜）　はっぱ（葉）　わっぱ（輪）　ねっこ（根）　しっこ（尿）　しっぽ（尾）

おっぽ（尾）　たんぼ（田）

などがそれである。なっぱは菜の葉、しっぽは尻尾、であろうし、はっぱやわっぱは〈ハ〉や〈ワ〉の反射的な繰り返し、しっこは尿（シ）→尿（シ）に、ねっこのこのような愛称的なこを添えたもの、などと考えられるが、たんぼは田圃として相当固定した語感を与えている。更に、これら砕けた言葉に連統するものとして、方言に注目してみよう、例えば、今の尾，に関する各地の方言を、東条操氏の方言辞典で調べてみると、

おじ、おじり、おば、おばた、おばち、げんのば、ごっほ、しりお、しりご、ずー、でぼ、どうー、へんぼ

など多数があげられる。即ち、元来の固有の音節である〈ヲ〉が残ったままで、複合的に多音節化している場合が多いのに気付くであろう。方言の語源には、説明のつかない、証明しにくい言葉も多いのであるが、一音節語の名詞が、やはり地方に於ても敬遠されて

いる様子が察せられる。参考までに、他の例も少しあげておこう。

○か（蚊）⇩がざん、がじゃみ、かっぽ、かとんぼ、かな、かの、がんじゃー、かんす、よが、

○け（毛）⇩けば、けぶく、ひげ、

○じ（字）⇩じーろ（児）、いーろ、

○た（田）⇩おきの、くな、たえ、たんなか、はだ、あが、たば、たばる、

○ひ（日）⇩あたさん、あとてさま、あなたさま、おてだ、こんにちさま、ちんだ、てーだ、てだ、ていら、とだいさま、とどございま、にちりんさん、にってんさま、によらいさま、ひどーさま、ひもと、もったいさん、おっさま、、おひさん、てんび、ひやし

○め（目）⇩めつら、めのす、めどこだま、めなこ、めのこだま、めんぱち、めだくだま

○め（芽）⇩しんほえ、ばい、ふき、めど、めど、もえ、もえず、めじょ、いじょ、めーじょ、めはり、

○も（藻）⇩がーもく、どもく、むく、もく、ども、もっぱ、

○わ（輪）⇩こま、はま、わんどろ、わさ、

以上のほかにも、まだ類例はあげられるが、これらを子細に検討していくと、言葉のなり立ちや、変化のしくみの諸相が色々明らかになって、興味ある問題を提示してくれるであろうが、今は、余りに方言に深入りする事から離れようと思う。そして、一通り見渡しただけでもわかったように、中には、元来の一音節語とは発生的に異り、単に多音節化したというのでは説明のつかない語が含まれているのである。例えば、「酢（ス）」では

あまざき、あまり、おはいり、きたかぜ、こめじ、さげ、はいりー、あまみ、あまん、

などが各地方で使われており、この中には、酢（ス）プラスX、なる形の語が含まれていない。しかしここでも、酢（ス）という一音節語が使用されないでいる点、氷（ヒ）→氷（コホリ）と同じように、やはり一つの多音節化が行われていると見てよい。又、方言に於て、文字の上では一音節語であっても、長母音化して二音節に発音している場合があるのは、京阪地方を歩いた者ならば、誰も耳にしているに違いない。蚊（カー）木（キー）戸（トー）といった具合で、徳島を中心に、関西の相当広い範囲にわたって行われている事は、又方言地理学の教える所であり、ここに

も多音節化の一例を見るのである。

註1　俗語とは元来雅語に対するが、所謂雅語の衰退と共に、現今ではその区別が次第に失われてきた。ここでは俗語とか婦人語とか、改めて定義づける事は省略して、普通そう呼ばれている一群を、テクニカル・タームとして用いるにとどめる。

註2　日葡辞書は、断るまでもなく、慶長八年（一六〇三年）長崎で刊行された、来日宣教師の伴天連（バテレン）や伊留満（イルマン）達のための、ポルトガル語での日本語辞書である。故に、室町末期から江戸時代初期へかけての言語を知る上での重要資料であるが、ここでは、一八六八年にパリで刊行された、その訳本であるパヂェスの日仏辞書を以て、便宜的に日葡辞書に代えるものである。以下本稿で日葡辞書とあるのは、日仏辞書を見ての事であるのを諒とせられたい。両書の間に注意すべき異同がある事は、土井忠生氏の詳しい報告がある。

註3　parole feminine; expression feminine;

註4　「しゃもじ」以外の前二語は、一部の社会を除いては次第に使用されなくなっている。説明するまでもないが、「かもじ」は元来髪の意から、まげを結う時の添え髪の意になり、「ゆもじ」は湯具である。「かもじ屋」と呼ばれる商人も、普通の街なみから殆んど姿を消した。

註5　この中で、鰹（カカ）、魚（トト）は日葡辞書で、尿（シシ）、草履（ゾゾ）、生米（メメ）、酒（ササ）などと共に婦人語に指定され、父（トト）は、小児語のように（Mot dont se servant les enfants;）指定されている。

註6　病気のことで、＜キ＞は気である。

註7　父母の呼称は、歴史的にも、地域的広がりの中でも、同一音節を連続せる場合が多い。

父⇒し、だだ　とと　ささ　ちゃちゃ　のの　てて（パパ）

母⇒かか　たた　だだ　なな　ちゃちゃ（ママ）

などが、古語辞典、方言辞典から拾い出せるが、更に言えば、中国語でも、爸爸（パパ）、媽媽（ママ）と言う。

なおこれとは別の方面で、例えば日葡辞書（日仏）の用例の中には、次のような一連の二音節語がある。

Bobo　ボボ　Parties sexuelles de la femme (paroles dont se servent les femmes et les jeunes filles)

Fefe　ゝゝ　Parties sexuelles de la femme.

Soso　ソソ　Parties secrètes de la femme.

隠語と呼ばれる一群の言葉の中には、これらとは別に、焦点をぼかす意味で一種のカタコト化が行われ、ある広がりを持っているが、婦人語との関係など、説明する用意がない。

五

以上述べ来ったことで、一音節語の名詞が、時間のタテの流れに於ても、空間のヨコの広がりに於ても、多音節化の道を辿らされている事を知った。しかし又、他面、その傾向をはね返して、それは長い生命を保ち続けている事をも知った。後者では、使用頻度から解明を試みてみたし、前者でも、私は音韻上の問題があるような口吻を屢〻弄してきたが、ありていに言えば、この方面で極めて知識の乏しい私には、ただ漠然とそう考えるだけで、秩序だって解明する用意も勇気も持ち合せていない。しかし、単に現象だけを提示してここで小稿を打ち切ってしまうというのも、何か無責任のようで、甚だ歯切れが悪い感じがするので、漠然としたなりで、私の考えを述べるべく、勇気をふるい起そうと思う。

日本語の音節構造の特質については、橋本進吉博士の周到な研究がある。博士はそれを

（一）国語の音節には原則として一つの母音が核心となっている。但し例外的に一つの子音から成るものもある。

（二）母音の前には一つの子音が附くのが常であって、二つの子音が重なって附く事もあるが、それは限られた種類のものであり、三つ以上の子音が附く事はない。

（三）母音の後に子音の結合する事はない。

とまず概括せられ、更に詳細な検討を試みておられるが、その中で、国語の音節は母音で終る開音節（閉音節は子音で終る）を常とする事、又外国語に見られる一音節内の二重母音乃至三重母音の存在が許されない事などを指摘されている。これを私流に平たく言えば、単独母音から成る開音節は、まず音節の性質からみて甚だ単純になり、音節と音節の区切れをはっきりさせる傾向を持つのである。私どもは、子供の頃、上から読んでも下から読んでも同じになる、〈シンブンシ〉などの言葉を教わって面白がったものであったが、やがて英語を習いはじめ、ローマ字で〈shinbunshi〉と書けるようになって、それを逆に読もうとすると、〈シンブンシ〉にならないばかりか、なんとも発音のしようがなくて、当惑したものである。即ち、開音節を逆に読めば閉音節になる仕組みで、〈Akasaka〉のように、母音で始まり、同一母音を繰り返せば、逆読みにしても同じになるが、それも仮名に書き改めれば、元通りにはならない。これは、閉音節の多い欧米語と国語との大きな違いで、有坂秀世博士の紹介される所によると、フランスでは、一単語内の音韻論的音節の切れ目について、学者間で屢〻議論が行われる程であるという。そして、国語が音節の切れ目を明瞭にしている点では、仮名とい

う表記法とあわせて、一音節の名詞の存在を、甚だ有利に導いていると考えられる。

次にこれを、一音節語を基調とする言語で、開音節を原則とし、故に音節の切れ目の又明瞭な中国語と比較してみよう。音韻上、まず両者の大きく相異する点は、中国語では、二重母音、三重母音を含む音節が甚だ多い事であろう。脚（chiao）海（hai）帥（shuai）などがそれで、中国語の音を正しく取り入れようと努めた上代を経ても、やがては日本式に、二音節の音にしたり、単一母音の語を訓として、あたかも日本語のように同化[註1]したりしたのであった。中国語の音節構造は斯様に複雑であって、加えてアクセントの所謂四声、有気声無気声の区別などがあるから、その総数は四百を越えるであろうが、日本語では、中古で、いろは歌なら四十七音、あめつちの歌なら四十八音に、濁音二十、これに拗音を加えても、たかだか八十程度[註2]で、両者の相異は、非常に大きいと見ねばならない。又、アクセントの点についても、日本語は、強弱（高低）の二段の区別しか持たないので、方式の点から単純である上に、開音節で切れ目が良いから、一音節の語では、他の語との関係で見るよりほかはない。「火ガ出タ」「日ガ出タ」の場合、前者は火に、後者はガにアクセントがかかると説明出来ても、火と日を取り出してしまえば、強弱高低といった処で相対的な事だから、両者の識別は容易ではない。もし同音異語がなかったとしても、この不便さは消えるものではなく、一音節語は、とかくコトバとしてよりも、オトとしてまず聞えてしまう。試みに前にあげた高頻度広範囲十五語を、人に読んで、どの位相手がわかるか調べてみると良い。木（キ）子（コ）手（テ）戸（ト）名（ナ）根（ネ）音（ネ）葉（ハ）日（ヒ）火（ヒ）身（ミ）目（メ）夜（ヨ）世（ヨ）絵（エ）をそのまま読んでは、相手は必ず一寸待ってくれと言うに違いないし、読み手も、生えてる木、子供の子、おててのて、ドアーの戸、名前の名、根っこの根、オトの音……などと、説明を加えたくなるものである。短い、点のような一音節語が、小児語や婦人語に於てとかく多音節化したり、言い換えられたりするのも、肯ける事であろう。即ち、一方で、国語の音節構造が単音節の独立を助長する反面、そこから更に音節数のきつい制約を受けるという、一音節語名詞の矛盾した両面が、現象面と同様、音韻面でも示されるのではないかと思う。

次に、奈良時代から平安時代にかけて、前の資料だけからの帰納によると、一音節語名詞に大きな消長のある事が指摘され、私はそれに受難時代という表現を敢てしたが、確かに消長を認めうるかとの資料面の再検討や、それが確証された上で、如何なる事情がそこに介在したかの考察は、残念ながら、私の側で全く進捗していない。それには、平安時代に入って消えたか、変化した一語一語を、更

に資料の範囲を広げて、あくまで追及していく方法が考えられ、それによってのみ立証も可能であろうが、もう一つ、外部的な要因、即ち時代の動きを無視する訳にはいかない。平安遷都という政治上の大事業も言語生活に深くからみ合ってくるし、国語史にひきつけて考えても、この両時代にまたがる変動には、実に画期的な事があった。今はそれらの一二を示して、参考とするにとどめるが、第一は音韻である。上代の特殊仮名遣の研究や、音韻史の研究が進むにつれて、当時の音韻論的音節の内容や数量が論じられ、次第に明らかになってきたが、この一音節語名詞にのみ関して重要なことは、音節数が平安時代に入って少くなった点であろう。ここで改めて考え直さねばならないのは、奈良時代から平安時代にかけて消えた一音節語名詞があるという事以上に、平安時代に入って新たに生じた和語としてのそれが殆んどない点である。消長と言っても、消のみあって長がないのである。仮説であるが、私はこの理由を次のように考えている。亀井孝先生の言われるように、「経済という点のみから言えば、語構成の資材として、一音節語は最も経済的能率的に使われる可能性が多い」のであり、言語の起源からみても、短い音節の語から多い方向へと向ったであろうから、日本語のように音韻上区別しうる音節数の少い言語にあっては、既に奈良時代（もっと古い時代をこめて）に於て、飽和状態、乃至は過剰状態になってしまったと見て良いのではなかろうか。それに加えて、音節数の減少である。細かい検討は省いて、大ざっぱな計算を試みよう。奈良時代三作品のみに例を見て、以下の六作品に例を見ない語が五六語あるのは既に述べたが、これを形式的にすべて消失語と仮定すると、五十音図の区別で分けて、次のような分布を示す。

ア—2、エ—1*、カ—1、キ—3*、ケ—3*、ク—1、コ—2*、シ—2、ス—2、セ—3、チ—1*、ヅ—1、ト—4*、ナ—3、ニ—2
ヌ—2*、ヒ—4*、ヘ—4*、ホ—2、マ—1、ミ—1*、メ—1*、モ—3*、ヤ—1、キ—1、ヲ—5、計五六語。

そして、石塚竜麿が示した上代で両類に別れる十五語（うち、ちともは古事記のみ）、え、き、け、こ、そ、と、ぬ、ひ、へ、み、め、よ、ろ、ち、も、が占める割合を五六語の中で求めてみると、＊印を付した合計の二九語、過半に当るのである。勿論、これだけで、奈良—平安の音韻数の整理が影響を与えたとは言いえないが、出発点の見通し程度にはなるであろう。

第二は、草仮名の発達と女流文芸の隆盛である。紙幅の都合で多言はしないが、仮名が[註3]原則として表音記号であるという事は、一音節語名詞が読んで区別しにくかった先の実験を思い合せれば、推論の手がかりとなろうし、特に音読されたとみられる物語類を考える

のも、重要であろう。そして、これは平安の中期を俟たねばならないが、女流の手になる事も、無視しては考えられない。

ところで、奈良平安の時代の推移に、新たに加えられた一音節語名詞はないかというと、これも資料を形式的に処理した結果では相当あるのである。即ち、消えた語彙数の五六語より多く、八〇語が増加分として指摘されるが、私が先に、和語としては殆んどない、と断ったように、この殆んどは漢字の字音語、借用語である。医禹可賀綺季義驥句具……などがそれで、字音語という事になれば、奈良時代の資料は更にそろえ直す必要がある。万葉集と日本書紀は、和歌、歌謡であり、古事記も訓読によるのだから、字音語が少いのは当然で、漢字を摂取した奈良時代に、これの劣ろう筈がない。ただ、実作品の上で借用語が次第に出てきて、以上の資料から言えば、徒然草に於て最も大きな位置を占める現象は、かなり注目する必要がある。大言海に解説されている一音節語名詞が、五一九語にのぼる事は既に述べたが、その大部分が借用語である事は、漢字がどういう理由で仮名文に組みいれられたのかを、良く説明するものである。一音節語は読んでは意を握みにくかったが、漢字で示せば、一目瞭然として余す所がない。一音節語の同音異語は音韻上きつい制限を受けるが、漢字となれば、制限がない。加えて、漢字には、一字一字、その本来の性質からある意味を持ち、場合によっては、深遠な思想的背景を持つ事すら多いから、簡にして要を極めるに甚だ便である。かの日葡辞書にしてからが、一三一語の一音節語名詞のうち、過半を借用語の解説に当てているのである。

予定の紙数を超え過ぎたから、標題の、一音節語名詞の、これからの運命について結論を急ごう。源氏物語では、世という名詞が、実に一三二六語も出てくる。源氏がいかに大作であっても、名詞で一作品にこれ程の用例があるのは、いかなる理由にもせよ、他に類がない。これは単にこの一例、一作品にとどまるのでなく、時代も内容も形式も異った各作品を比較してみた所でも、頻度の高い語はほぼ一定して、抜群の用例を示している。日本語の、一音節をどこからでも容易に抜き出しやすいという音韻上の性質を、裏側から見れば、どこへでも容易に入り易い性質ともなる訳で、源氏物語に世が頻出するからとて、決して目ざわりにも耳ざわりにもならないのである。そして、頻出をさまたげない、即ち高頻度を保つ故に、一音節語名詞は強靱な生命力を持ち、将来にわたっても持ち続けるであろうと言えるが、借用語については、別の運命を辿らされる可能性が強い。それは、事の良否は姑く措き、戦後に制度として行われ、なお推進されようとしている漢字の制限である。それは借用語の消長に直接比例するが、漢字を日本語から追放しきれるか否か

に、この運命はかかっている。戦前と戦後を比較しただけでも、それら借用語の多くは、消え去らないまでも、稀用の彼方へと押しやられた。そしてこの程度が、現在の時点で適当であるのか、将来にわたっても進むべきなのか、単に運命という流れに任せるだけでなく、なお考えたいと思うのである。

なお、国語学史上、所謂音義説をとる中で、特に一音一義説を奉ずる橘守部[註4]の考えを取りあげて、更に検討を加える用意であったが、他の述べ残した事と共に別の機会に譲りたい。

註1　例えば、馬（ma）は、音としてはバとなったが、〈ウマ〉はその多音節化であろう。これは同じ舶来生物の梅（mei）にも言える事で、〈ウメ〉も又そうである。なお、音で、何故バ行音に変ったかの説明は、省略したい。

註2　上代では更に多く、清濁合せて、八十七語程が想定されている。勿論、拗音を含めない計算である。

註3　仮名は本来表音記号そのものであるが、それによって当時のすべての音が表記されたとは限らず（撥音、拗音、濁音）、又、仮名のすべてに対応する異った音があるとは限らない点で、「原則として」とした。

註4　音義説は古くは室町時代から唱えられたが、近世に入って活潑となった。特に一音一義説をとる者は、この守部をはじめ、富樫広蔭、堀秀成や所謂言霊派（ことだま）の、高橋残夢、林園雄などがあげられる。橘守部の「助辞本義一覧」の冒頭を、参考まで少しあげておこう。

「はの音には、刃（ハ）、歯（ハ）、葉（ハ）、羽（ハ）、端（ハ）、などの如く、物を切り分ち離つ意の一統あり。はの音して云詞の上に、離（ハナル）、放（ハナツ）、葬（ハフル）、払（ハラウ）、抜（ハラヒ）、撥（ハタク）、掀（ハヌル）、掃（ハラフ）散等の類多かるも、此故なり。……又此はに、歎息の一統（スジ）あるは、あ行と同じ喉音のゆゑ也。そはあの音にて、ああと歎くを、又はの音にても、はれマアと、歎く事のあるが如し。即此ああと、はれと二つ相重りて、歎息の言に、あはれとは云也。……」

即ち、一音ごとに五統の義ありと説いて、すべての語をそれで解明しようとするのである。

○使用辞書、索引類、及び参考書目

A　用語索引

高木市之助編「古事記大成第七～八巻索引編」、大野晋著「上代仮名遣の研究附録書紀索引」、正宗敦夫著「万葉集大成十五―十八巻索引編」、山田忠雄編「竹取物語総索引」、西下経一他編「古今集総索引」、吉沢義則他編「源氏物語用語索引」、佐伯梅友他編「紫式部日記総索引」、東節夫他編「更級日記総索引」、時枝誠記編「徒然草総索引」

B　辞書

正宗敦夫編「倭名類聚鈔索引付」、京大国語教室編「箋注和名抄索引付」、パヂェス「日仏辞書」、村田了阿著「俚言集覧」、大槻文彦著「大言海」、東條操著「全国方言辞典」及び「標準語別分類方言辞典」、新村出編「広辞苑」、金田一春彦編「古語辞典」、国語学会編「国語学辞典」等。

C　参考書

橋本進吉著「国語音韻の研究」「文字及び仮名遣の研究」、亀井孝著「Chinese Borrowings in Prehistoric Japanese」、有坂秀世著「国語音韻史の研究」「上代音韻攷」、今泉忠義著「国語学概論」、金田一春彦著「日本語」等

あとがき

小稿は、嘗て私が大学院で亀井孝先生の講筵に列した時、題を賜って提出したリポートであるが、先生の御慫慂により発表することにした。既に当時から三年経って再検討を加えるべきながら、私の専攻が国語学から少し離れていて、その用意に乏しく、今、前後に若干の加筆をするにとゞめた。先生の御学恩に深謝しまつると共に、その御叱正を俟って、今後のはげみとしたい。